

組合員の生涯をサポートする労働組合たれ

宮田 義二

みやた・よしじ IMF-JC第1代議長



1924年山口生まれ。39年八幡製鉄技能者養成所入職。54年八幡製鉄労組書記長。60年鉄鋼労連書記長。68年同委員長。74年IMF-JC議長(鉄鋼労連委員長兼任)。84年鉄鋼労連最高顧問、IMF-JC顧問。85年国際経済・労働研究センター理事長。87年松下政経塾塾長。主な著書:「組合主義に生きる」(労働政策・研修機構)「指導力」(PHP出版)「組合ざっくばらん」(東洋経済新報社)他多数。

宮田義二 IMF-JC結成の立役者である。新しい時代の流れを読み取り、それを具体的な運動として形作り、実現していく。まさに「先駆の運動家」である。今でも、「もついでらう」と言いながら、事務局のたつての願いに応えて、毎年1月の京都での労働リーダーシップコースで、「労働運動史」を若いリーダーたちに語り続けている。それは「労働運動の魂」の継承である。

40周年を迎えたIMF-JCの新しい役割について尋ねると、「新しい運動は新しい人たちが考えるべきこと」と断った上で、「一つは、連合もJCも、まだ基本的な運動の方向性が確立されていない。JCのリーダーたちが、真剣に議論して新しい方向性を確立してほしい。二つ目は「労働基本権の持つ意味を再認識してほしい。団結権、団交権にしても、対象は雇用者全体となっていることから、その活用を図るべきである。」と、三つ目は「労働組合の役割は、現役時代だけでなく組合員の生涯にわたるサポートをすることだ」と、超高齢社会における労働組合の役割をすばり言い切った。その面で特に年金問題に労働組合はもっと真剣に取り組むべきだと語った。

最後に、JC運動の中で、時代の状況に応じて変化するものもあるが、「労働リーダーシップコースだけは、JCとして継続していったほしい。この38年間継続してきたこのリーダーシップコースが、JC運動を支える生命線であることだけは言っておきたい」と付け加えた。

結成40年は第二の草創期

瀬戸一郎

せと いちろう IMF-JC 初代事務局長



1927年東京生まれ。45年国鉄教習所に入る。勤めの傍ら、明治学院大学英文科に学ぶ。奨学金を得て、50年米国オハイオ大学経済学部に入學、修士号を受けて帰国。54年ノースウエストに入社。57年IMF日本事務所所長。64年IMF-JC結成、福岡知の初代議長とコンビ組み、初代事務局長となり、24年間。88年IMF-JC副議長。77年から93年までIMF書記次長も兼任。93年からIMF-JC顧問。

初代事務局長の瀬戸一郎は言う。JCの特色は、「常に時代を切り開く先駆的な役割だ」と。

JCの結成自体が、時代の先端を行っていた。イデオロギーの違いによりナショナルセンターが四分五裂していた状態の中で、JCの結成に先立つこと7年、1957年に日本事務所の東京開設と同時に、各金属労組との交流活動を開始した。

今でもその頃のいろいろな経験を思い出す。「最初はオルグにあたって相談する相手もなく、ただ一人で『めくら蛇に怖じず』のたとえのように、連日各単組、企連、単産の本部を歩き回り、中央委員会や大会があると聞けば、招待状もないのに押しかけて行って挨拶をさせてもらうまでなほったこともあった。労働運動に素人の身には苦しい組織活動であったにちがいない。

そういう苦労が実を結び、次第に古賀専（造船）、宮田義一（鉄鋼）、大谷徹太郎（全機金）をはじめとする中央・地方の百戦錬磨の組合指導者の知遇と協力を得たことが成功につながった。「このような百戦錬磨の先輩各位の先駆者の勇気と決断力の総結集が、あらゆる中傷・批判・妨害を乗り越えてJC結成の原動力となった」と振り返る。

「50年を展望してどういつ手を打つか、もっと皆でけんけんがくがくと議論した方がよい。結成40年とは、まさに第二の草創期といえる」



労働者教育 わがライフワーク

金井 信一郎

かない・しんいちろう 明治学院大学名誉教授

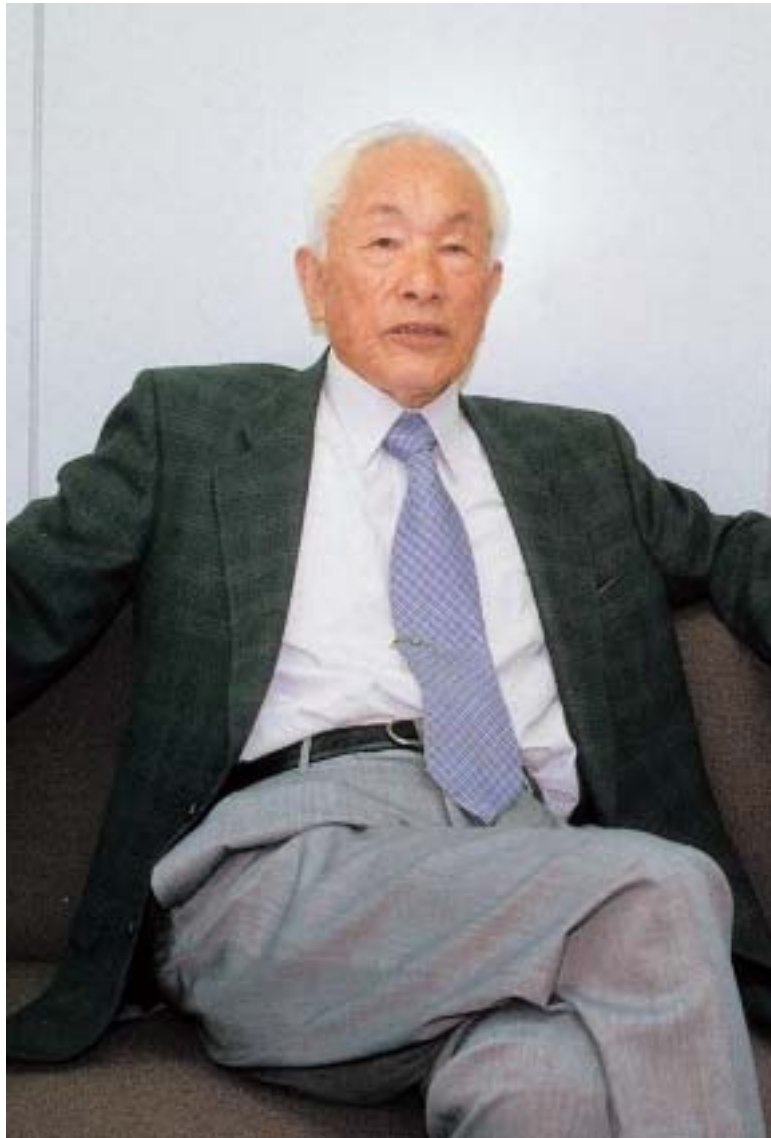
1917年甲府生まれ。41年東北大学法文学部経済学科卒。54年米国ウィスコンシン大学大学院経済研究科修了、MA取得。62年明治学院大学教授。66年経済学部長。74年学長(第5代) 82年退任。88年聖学院大学学長(初代) 94年退任。名誉学長。名誉人文学博士(米国) 主な著書:「社会政策講義」(共著、青林書院)「社会改革への道50年」(単著、聖学院大学出版会)他多数。

金井とJCとの出会いは古くJC結成前の1958年夏に遡る。全米鉄鋼労組(USWA)の社会局長であり、北米長老教会(キリスト教会派)の幹部でもあるジョン・G・ラムゼイ氏の来日にあたり、金井は日本基督教団から、瀬戸一郎はIMF本部から、それぞれ指令を受け、羽田空港に二人で出迎えた。この時が、金井と瀬戸の初めての出会いとなり、瀬戸が明治学院大学の同窓生であることを知り、非常な親しみを覚えた。

その後、金井がまとめ役をした日本クリスチャンアカデミーの「労働組合リーダーの話し合い」の場に、瀬戸事務局長と福岡議長も参加した。その折、金井が米国ウィスコンシン大学留学時に知った大学と労働組合が提携実施している労働者教育の話をした。そして、瀬戸や福岡に「日本でも是非労学提携した労働者教育をやりましょう。大学の方は、私のいる明治学院大学で引き受ける用意があります」と提案したことが労働リーダーシップコースの淵源となっている。

日本で最初の労学提携による「労働リーダーシップコース」が開講したのはJC結成3年後の67年7月のことである。

開講以来、受講生は東西合わせて、現在までに、2000名以上に及んでいる。金井は「今日、わが国労働運動の中で中心的役割を果たしているJCの底力には、このリーダーシップコースが大きな影響を与えていると信じ、大きな満足感を覚えます」と頬を紅潮させながら語っていた。



くのおさむ IMF JC元事務局次長
久野 治
 J.C.がやらずして誰がやる
 との気概を持って前進を

1923年岐阜県多治見市生まれ。37年三菱電機名古屋製作所入社。46年復員帰国後、労働運動に参加、青年部長、副組合長、中央執行委員を経て一時職場復帰。63年三菱電機労組委員長としてカムバック。JC東海地連議長、JC事務局次長などJC発展に活躍。83年三菱電機退社。労働評論家、古田織部研究室として現在に至る。主な著書：「ものがたりIMF・JC」、「労働問題の基礎知識」他多数。

JC事務所が三徳八重洲ヒルの4階で決まるうとしたとき、久野は冗談まじりにオナーの尾島社長に言った。「あなたの居住区としての10階はそのままとして、このビルは『JCビル』となりますよ」と。中産業別に分かれて組織されている鉄鋼、自動車、造船、機械、電機などJCの加盟産別が共通ビルで、同居すれば効果は大きく、大変な経費節約になると当時はそんな夢のような話を考えていたからだ。

それ以来久野は、労働組合の組織形態は大産業別だという、いわばドイツのIGメタルを心に描いている。過般もJC機関誌に「大金属連合への夢いまだ忘れず」の一文を寄せている。(98年夏号)

世界経済がグローバル化していく二十世紀を展望して、IMFの明日・JCの未来を考えていくとき、久野は「アジア地域春闘の構築」を提案している。(JC機関誌2002年冬号に寄稿文として掲載)。

久野は「私はアジアは一つの思想に立っており、IMFの『公正労働基準』に照らしても、アジアで国を異にすると言え、金属産業に働く労働者の労働条件を、他国の故にして放念することは許されることではない。口幅つたい言い方であるが、中国の上海あたりをアジア地域春闘の指令基地として、アジアで働く労働者が大きくなつねりとなって金属主導のもとで闘う日の来ることを期待する」と力説。「これからもJCがやらずして誰がやる」といふ気概を持って進んでほしいと。